

鈴木晃仁・石塚久郎 編

『身体医文化論Ⅳ 食餌の技法』

本書は、慶應義塾大学出版会からシリーズで刊行されている「身体医文化論」の第四集として刊行されている。第一集は「感覚と欲望」、第二集は「運動と(反)成長」、第三集は「腐敗と再生」の各テーマを扱ってきた。第四集にあたる本書は、「食」の問題を扱ったモノグラフ十四編に序章が付された十五編で構成されている。

すべての章を詳細に論じることができないので、全体の内容と評者の視点から関心をもった数章を取り上げて紹介の責を塞ぎたい。

序章は編者の一人である石塚による「食餌の技法の試み—新たな食文化論に向けて—」と題された全体の総括と方向性に関する概説論文である。これについては後述したい。

第Ⅰ部は、「食餌のパソロジー—断食から拒食へ」と題され、久木田直江の第一章「マージェリー・ケンプの断食—ヴァージン・アイデンティティの回復へ」、宇沢美子の第二章「食べない技法—紳士と知識人とサムソンのための食餌法」、加藤めぐみの第三章「拒食症的身体／論理のジェンダー・トラブル—ウルフにおける食餌と身体」の三章からなる。ここでは、「食」を論ずるうえで「食をとらない」状態としての断食や拒食といった現象から論を起していることに注目し

たい。

第Ⅱ部は、「胃弱と消化の技法」と題され、阿部公彦の第四章「漱石の食事法—胃弱の倫理を生きたということ」、石塚久郎の第五章「バイオグラフィア・デイスペプシア—カーライルの身体と“胃弱”の発見」、大道寺慶子の第六章「江戸の食傷—病の想像の“考察”の三章からなる。ここでは、「胃弱」や「食あたり」といった食に関わる身体的失調の中に込められた文化的表徴を読み解く点で共通した視角をもっている。

第Ⅲ部は、一転して「食養生する身体—食餌、セックス、自己のテクノロジー」と題され、浮ヶ谷幸代の第七章「食餌実践を飼い慣らす人たち—現代日本における糖尿病者の事例から」、梅川純代の第八章「媚薬—中国性技法における「食」の二章からなる。このパートでは、糖尿病の食養生と媚薬という二つの観点から食を「自己のテクノロジー」としてとらえながら読み解いていく。

第Ⅳ部は、「思考する胃—哲学と精神分析における食の饗宴」と題され、河野哲也の第九章「哲学者の食卓—わたしたちは、誰と食べ、いかに食べ、何を食べるのか」、知野ゆりの第一〇章の「カント哲学の食事作法…よく味わってから飲み込むこと—享受の一体化と味覚／趣味の差異化」、遠藤不比人の第十一章「メラニー・クラインというスキヤンダル—精神分析における食と排泄の弁証法」の三章からなっている。このパートにおいては、哲学や精神分析といった形而上の世

界での食のあり方・とらえられ方を問題としている。

そして、最後の第V部「食(卓)」と文学のポリテイクスは、小宮彩加の第二章「吸血鬼の食餌―プラム・ストーカーの『ドラキュラ』に見るヴィクトリア朝の「食の問題」」、小菅隼人の第三章「演劇としての食事―タイタス・アンドロニカス」における人肉食と料理服、浅井千晶の第四章「クック家の悲劇―生産神話の崩壊」の三章よりなっている。このパートでは、食が文学作品の中で重要なモチーフとなっている作品を取り上げ、そこでの食へのまなざしを解き明かしている。

本書の基本的視点について、編者の一人の石塚は、序章において次のように述べている。「食餌の技法」は美食の文化史でも食卓の歴史でも味覚の変遷史でも料理の歴史でもない新たな食の身体医文化史を構築すべく、身体、医学(医術)、健康と病、自己を巡る食の総体的概念を「食餌の技法」と捉え直し、現代に求められている新たな食研究への先鞭をつける。(十四頁)編者らが、一定の問題意識として抱いているのは、本書以前の食に関する歴史研究が「食欲」が自然にある、その欲求を発現、充足させるものとして文化が想定されている中で形成されてきたのに対し、本書はその本能としての食欲すらも実は文化的な文脈性のなかで規定されてきたという視点である。すなわち、食を人間主体の文化的産物として見る視点とともに、食自体が人間の身体的・精神的自己を形成してきたととらえる視点をも含んでその文化の変遷を各

執筆者のそれぞれの手法で読み解いている。それは「食には常に自己の「生」全体を被い尽くすほどの過剰な意味がまわりつく。このように、食べることは、そもそも身体を道具・手段として使う重要な身体技法の一つであって、社会化されるある特定の型・習慣がハビトゥスとして身体に埋め込まれる「トポス」となると同時に、そうした身体経験を通して自己が成型されるテクノロジー(技法)の一つとしても機能する」(石塚、十三頁)と記されているように、少なくとも編者にあつて、フォーコー(Foucault, M.)が一連の知の系譜学の中で提起した「自己のテクノロジー」の系譜において食をとらえかえそうとしている点は、本書を従来の食に関する文化史の記述を越えたアンソロジーとしている大きな要因である。

その試みが、どこまで各著者の共通理解になっていたかに関してはいくぶん議論が分かれるだろう。対象へのアプローチの方法は、社会学的手法もあれば、比較的従来の思想史・文化史の手法に近い方法論もとられている。このあたりは、おそらく共同研究としての相互の研究的自立性を尊重した結果であろう。ただし、各著者はそれぞれの持ち味の中で編者の意図を汲もうとしている意欲が伝わってくる。敢えて評者の好みからいえば、この種のモノグラフでは仕方ない面もあるが、副題が長いなど感じる論文もあるし、少なからず主題あるいは副題の表現にやや銜いがあるように感じるの筆者か。

そのような点は此事に属する。「食育」が強調される昨今、自己のテクノロジ―としての食の問題に真つ向から、しかも従来の文化史的アプローチを越えて、身体・健康・医療の思想史として再測定した試みには賛辞を贈らねばならないだろう。

(瀧澤 利行)

〔慶應義塾大学出版会、東京都港区三田二丁目十九―三十、電話〇三―三四五一―三二六八、二〇〇五年八月、A五判、三七八頁、三八〇〇円〕

神谷 昭典 著

『日本近代医学の展望 医科大学民主化の課題』

二〇〇五年暮れ、一〇何年かぶりに大阪の医史研究会に出席して、ふるい仲間の人かにお会いした。そのなかに、喜寿をむかえた著者もおられた。

これは、『日本近代医学のあけぼの——維新政権と医学教育』（一九七九年）、『日本近代医学の定立——私立医学校済生学舎の興廢』（一九八四年）、『日本近代医学の相剋——総力戦体制下の医学と医療』（一九九二年）（いずれも医療図書出版社）につづくものである。これで著者の日本近代医史四部作が完結したことに、まずお祝いをもうしあげたい。いずれも緻密な調査にもとづく独自の切り口のもので

ある。

本書がとりあげている医科大学とは主として、著者がまなび、たたかった名古屋大学医学部である。いうまでもないが、愛知県立医科大学は、一八八七年の勅令第四八号「府県立医学校ノ費用ハ明治二十一年度以降地方税ヲ以テ之ヲ支弁スルトヲ得ズ」にもかかわらずいきのびた、数すくない公立医学校の一つである。著者が強調するように、地域社会のために自前で運営されてきた医学校であって、国家目的にそって上から創成された学校ではない。その学校、教職員、学生が国家の意志によつてどんな犠牲をしいられ、それに抵抗してきたか。その壮大な叙事詩が本書である。

第一章は『特高月報』からみた名古屋帝大医学部」。キリスト者学生運動から無産者医療運動にとびこんでいった青木文次、その同志米沢進のことや、「名帝大医学部共産主義グループ」のことなどがのべられている。ここで目につくのは、教授たちが左翼学生に庇護的であったことである。青木の獄中書簡は、この闘士のういしいし心をつたえている。本章にはまた「名古屋医科大学助手団スト」の項が付載されている。県立愛知医科大学は一九三二年官立に移管されて名古屋医科大学になったが、このさい東京帝国大学出身者を採用して県立以来の九名の教授が任用されなかったことに抗議して、助手団がストライキにでたものである。この助手団の結束はのちにのこった。

第二章「戦時下医育と戦後処理」は、旧「満州国」のジャ